

国鉄通学と城監督のサッカー部

吉田 英生(昭和49年卒)



私は亀山から国鉄と近鉄を利用して津高に通いました。国鉄紀勢本線には蒸気機関車(C57)が一九七三年九月三十日まで走っていましたので、二年半を汽車通学したことになります。亀山―下庄間にある安濃田トンネル(二一六・四m)が近づくと、煙におおわれないように客車の窓をあわてて閉めたものでした。また、なまこ壁(身近なところでは「くら寿司」のような壁)で個性的だった津駅舎が現在の駅ビル「チャム」に建て替えられたのは同年三月二十一日―ために無煙化までの半年あまりの間に、開業時は真っ白だった一番線ホーム側のチャムの壁は煙の犠牲となり真っ黒になってしまいました。おおむね一時間に一本の少なさに泣かされるのは今も同じですが、始業時刻に間に合うためには亀山発七時十二分の伊勢市行き列車に乗らなければならず、関・亀山方面からの「国鉄組」は生徒の中では誰よりも早く七時五十分ごろに学校に着いていました。人並み程度には受験勉強もしましたので慢

性的な寝不足―それに追い打ちをかける「田舎はつらいよ」の早朝通学の中、眠気もさめるひとときは津から津新町まで一駅だけ乗る近鉄で、S学園のお嬢さんたちと一緒に三分間でした。あと、国鉄がらみで苦々しく思い返すことは、高二の文化祭前に夜遅くまで準備をしたときに、津発二十時五十二分の亀山行き最終列車に乗り遅れたこと。当時は、そのあと二十時二十分発の東京行き寝台急行「紀伊」があったのでやむなく乗りまじたら、車掌さんにB寝台上段／中段料金一、一〇〇円と急行料金一〇〇円と運賃八〇円の切符を切られました。現在の津から亀山の運賃は三二〇円ですので、鉄道に関して当時の物価は四倍としてお考えください。その車掌さんは職務



に忠実で当然といえば当然のことをしただけだったとは思っていますが、たった二〇分の乗車で、二八〇円／人といい数字は四十五年経っても未だに忘れません。「規則はつらいよ」トホホ。

高一と高二の二年間は文字通り毎日がサッカー、蹴蹴蹴蹴蹴蹴：月々土曜の練習に加えて、シーズン中は日曜に試合で県内のいろんな学校に行きました。写真は修学旅行先の蔵王の御釜をバックにした想い出の一枚で、後列左から小竹惟校長先生、小畑良洋、原田直樹、中村俊樹、川口寛、正木郁夫、筆者、大杉啓二、城秀一先生、前列左

から中西秀伸、西村修一、大平陽一、神戸洋史、松村尚。監督の城先生は、四日市中央工業高校サッカー部の名監督と知られた城雄士先生のお兄さんでした。その四日市中央工業高校に終了直前まで1-0でリードしたものの最後の最後で逆転負けしたときには、全員で泣きました。城先生には、津工業高校との練習試合前半で緊張感を欠いたプレーをしたときと、大雨の中で練習した後にプール脇のシャワーを泥だらけにしたままにして苦情が出たとき

の二回、強烈なビンタを食らいました。今ですと体罰云々となるかもしれませぬが、城先生に心身ともに厳しく鍛えていただいたことを、津高時代の貴重な宝だと思っています。城先生は惜しまらしくは二〇〇〇年七月二十二日に亡くなられ、昔と一緒に語ることができなくなりましたが、われわれ同期は還暦を過ぎた今もメーリングリストで頻繁に交信し、毎年正月二日には新年会を続けている次第です。津高に感謝！(注)国鉄の発車時刻は一九七二年十月の時刻表によります。

京都大学工学研究科航空宇宙工学専攻教授(連絡先:sakura@hideoyoshida.com)